

# KHIS



## NEWS LETTER

甲南大学人間科学研究所  
Konan Institute of Human Sciences



2005  
Vol. **05**

甲南大学人間科学研究所が、今年度から来年度にかけて取り組むテーマの1つは「アメリカのあり方とグローバリゼーション」です。

その成果は来年度末に甲南大学人間科学研究所叢書

心の危機と臨床の知第7巻『心と身体の[オルター]グローバリゼーション』（仮題）として出版される予定です。

ニュースレター第5号では、このテーマに沿って行われた最新のミニ・シンポジウムの模様をレポートします。





## グローバリゼーションの生—政治学——例外状況の諸相



講 師: 増田 一夫  
(東京大学大学院総合文化研究科/地域文化研究)  
指定討論: 西 欣也 (甲南大学/文学・芸術理論)  
司 会: 港道 隆 (甲南大学/哲学)  
日 時: 2004年11月26日 (金)  
場 所: 18号館3階 講演室

### 目

々私たちの暮らしに影響を及ぼしているグローバリゼーション。グローバリゼーションという言葉の定義を正確にするのは困難ですが、ひとまずは、経済などのシステムが国家という単位を超えて共有されるようになる動きと捉えてよいでしょう。グローバリゼーションは、現代人の心の危機の問題とも密接に関連しています。このグローバリゼーションを先導するのが、唯一の超大国として今もっとも強い軍事力、経済力をもつアメリカ合衆国です。

今回、人間科学研究所では、東京より増田一夫先生をお招きし、「アメリカのあり方とグローバリゼーション」をテーマにミニ・シンポジウムを開催しました。グローバリゼーション、アメリカおよび現代社会の抱える大きなひずみに、哲学の立場から鋭い問題提起がなされました。増田氏は、「生-政治学」と「例外状況」というふたつの概念を手掛かりにして論考を進めました。生-政治学とは、ミシェル・フーコーにより提示された概念です。この多少難解な概念に近づくために、ハンナ・アーレントとジャン＝リュック・ナンシーの思想が参照されました。アーレントは、近代に生きる人間を「労働する動物」と呼び、「近代人にとって最も価値あることはできるだけよい条件で長い時間生を享受することであり、このような時代の社会を支配する政治とは動物種の自己管理としての法則に他ならない」と喝破しました。ジャン＝リュック・ナンシーは、「すでに自然的な生は消滅し、生命は自生するものではなく技術によって管理されるものとなった」といい、それを「エコテクニ（技術-生物圏）ecotechnie」という概念を用いて説明します。いまや一切の生はエコテクニのなかで発生し、もはや人間は自らの生の主権を握ってはいません。主権はエコテクニそのもののなかに含まれ、生と権力は目的性をもたないままにどこかへと進みつつあります。生-政治学とはこのような、人間が労働する動物と化し、かつその生が技術的に管理される体制のもとに発生するものなのです。アメリカという唯一の超大国による覇権は、このような文脈のなかで考えられるべき問題であると増田氏は強調します。

次に、例外状況とは、ナチス・ドイツの法学者カール・シュミットが『政治神学』のなかで使用した言葉です。通常の法が効力を失うような状況、たとえば戦時などを指し、国家存立の危急により宣言されます。国際法を意のままに変更する現在のアメリカ合衆国は、さまざまな言説を駆使して例外状況を演出し、自らの行為を正当化しようとしています。しかし、例外状況にはもうひとつの解釈が存在すると増田氏はいいます。イタリアの思想家ジョルジョ・アガンベンによると、例外状況、つまり「法的な秩序の外部」は、戦争状態ではなく平時の社会のなかにこそ存在します。たとえば難民。彼らは戦時のように意図的に抹殺されるわけではありません。しかし、生産と消費という経済のシステムに入ってこないというだけで、日々隠然としたかたちで余計者として処分されています。増田氏は、「この構造はいまや戦争よりも大きな問題になっているのではないか」との問いを聴衆に投げかけました。そして、私たちは今、グローバルな民主主義がその反対物である未知の全体主義に反転する臨界点に立っているかもしれない、と注意を喚起しました。

つづく第2部のディスカッションでは、指定討論者の西氏やフロアの参加者を交えて、「例外状況」「心」等、講演で取りあげられた様々な言説の解釈についての議論が活発に交わされました。

このような、明確な主体も目的もないままに進行し続ける巨大なシステムのなかで、今、私たちにできることはあるのでしょうか。あるとすれば、まず立ちどまり、世界の現状に目を向けることでしょうか。増田氏はある数字を提示することでそれを私たちに示しました。それは「4200万」という数字です。この数字に「人」をつければ、2002年における世界のHIV感染者の総数になります。「ドル」をつければ、同じく2002年のアメリカの国防予算の1時間あたりの額になります。これは偶然の一致に過ぎないことですが、このふたつの数字が意味するものの落差を、その衝撃を、私たち一人ひとりが深く実感することが、今、必要とされているのではないのでしょうか。



# 現代詩を手掛かりにして見る9・11以降のアメリカ社会



講師：田口 哲也  
(同志社大学言語文化教育研究センター/比較文化論)  
指定討論：秋元 孝文(甲南大学文学部/アメリカ文学)  
司 会：港道 隆(甲南大学文学部/哲学)  
日 時：2004年12月10日(金)  
場 所：18号館3階 講演室

**昨**年11月の大統領選でブッシュが再選しました。このことが示すとおり、9・11以降、アメリカ社会の保守化は強まっています。アメリカの現代詩を研究されている田口氏は、Eメールや電話、直接の会話などを通じて生の声を聞くと、この社会が憂慮すべき方向へ向かっていることが一層実感されるといいます。たしかに戦後の日本が憧れた「自由の国」というアメリカ像は影を潜め、アメリカはかつてのように日本人の興味をひかない国になっています。旅行先としての人気もアジア圏の国に奪われました。しかし好むと好まざるとに関わらず、これからも日本は、そして世界は、政治的・経済的・文化的超大国アメリカという「他者」と付き合っていくべきではありません。したがって田口氏が指摘するように、長所短所をふくめてアメリカに関心を持ち、この他者を分析し、知る必要があります。

今回の研究会で、田口氏は9・11以降に生まれた詩のアンソロジーを中心に、さまざまな現象に言及されながら、アメリカの実像に迫りました。氏が紹介されたのは、詩歌集“An Eye For An Eye Makes The Whole World Blind: Poets on 9/11”(「目には目を」が世界を盲目にしてしまう—9・11をめぐる詩)で、これはメールを通じて英語圏から募られたものです。現在、言論の自由さえ脅かされているなか、一見すると目立たない詩作の場が体制批判の空間のひとつとなっていることが注目され、文化の力として期待できると氏はいいます。けれども、この詩歌集を読み進めると、期待とは逆に違和感を覚えるような内容——保守的な考えや、ホイットマンなど伝統を振り返り過去の栄光に浸る姿、聖書的な表現——が散見されます。60年代のカウンターカルチャー時代を経験した編者たちがこのような編集をするのは、ある種の「後退」ではないかと論じられました。9・11以降、アメリカ社会はそれほどまでに追いつめられているのだといえます。

しかしアメリカは外部からの脅威によってはじめて危機に陥るのか、

否、むしろ内部から崩壊するだろう、というのが田口氏の見解です。たとえば60年代に盛り上がったベトナム反戦運動や公民権運動は、ケネディ大統領暗殺、キング牧師やマルコムXの暗殺など、銃弾によってあつという間に鎮圧されてしまいました。ここには、トップが暗殺されるとなれば崩壊になるアメリカ社会のあり方、そして現実をとにかく力でねじ伏せ、その後から——自分たちは神から選ばれた民だという宗教的信念に基づいて——理屈を付けるというこの国の本質が現れているとされます。また、この社会がいかに不平等な差別と暴力の上に成り立ってきたかについても、詩を例にとりて指摘されました。つまり、アメリカが謳ってきた「自由」とは一部のエリートの白人(男性)にとってのものであり、白人以外の人種、とくに黒人の大多数は不当な差別や暴力を受け続けているのです。また、食の面でもアメリカは異常だと述べられました。高カロリーのファーストフードの常食、国民病となった肥満……実際、超現実的な太り方をしている人に多く出会うと、この国が文字通り病んでいるのだと印象づけられるといえます。

このような不安要素を内部に抱えたアメリカ社会は、マスメディアから流れる映像情報の力に晒されています。氏によれば、メディア経由の情報は非常に限られており、また、為政者によって操作・管理されているので正確ではありません。強烈なメッセージ性をもった映像のインパクトに人間は弱く、ステレオタイプの勧善懲悪論が容易に受け入れられています。こうした事態にいかにか知識人が対峙できるのか、これが今問われているとされました。

第2部では、さらに踏み込んだアメリカの事情について質疑応答が交わされ、政治レベルにまで議論は及びました。今、ただちに私達に何ができるかと問うと、簡単な答えは出ませんが、少なくとも、こうした議論を重ねながら、アメリカという他者について関心を持ち、実際の姿に近づく努力を払い続けることが重要でしょう。





## ※これまでの活動

2004年11月～2005年1月

### 研究会

第16回 ミニ・シンポジウム **グローバリゼーションの生—政治学—** 例外状況の諸相

日 時 : 2004年11月26日(金)  
講 師 : 増田 一夫  
(東京大学大学院総合文化研究科/地域文化研究)

指定討論 : 西 欣也(甲南大学文学部/文学・芸術理論)

第17回 ミニ・シンポジウム **現代詩を手掛かりにして見る9・11以降のアメリカ社会**

日 時 : 2004年12月10日(金)  
講 師 : 田口 哲也  
(同志社大学言語文化教育研究センター/比較文化論)

指定討論 : 秋元 孝文(甲南大学文学部/アメリカ文学)

## ※これからの活動

2005年2月～

### 出版事業

甲南大学人間科学研究所叢書 心の危機と臨床の知5

『埋葬と亡霊——トラウマ概念の再吟味』

編 者 : 森 茂起(甲南大学/臨床心理学)  
執筆 者 : 下河辺 美知子  
(成蹊大学/精神分析論・アメリカ文化)

白川 美也子  
(国立天竜病院/精神医学)

高橋 哲哉(東京大学/哲学)

棚瀬 一代(京都女子大学/臨床心理学)

中井 久夫  
(兵庫県こころのケアセンター/精神医学)

福本 修(恵泉女学園大学/精神分析)

港道 隆(甲南大学/哲学)

森 茂起(甲南大学/臨床心理学)

2005年2月末 人文書院より出版(2500円+税)

甲南大学人間科学研究所叢書 心の危機と臨床の知6

『共振——花の命・人の命』(仮題)

編 者 : 斧谷 彌守一(甲南大学/言語論)

甲南大学人間科学研究所叢書 心の危機と臨床の知7

『心と身体の[オルター]グローバリゼーション』(仮題)

編 者 : 港道 隆(甲南大学/哲学)

上記2巻は2006年2月頃 人文書院より出版予定

### 公開シンポジウム

第6回 **花の命・人の命**

——震災10年を記念して生命(いのち)を考える(仮題)

日 時 : 2005年7月24日(日)

場 所 : 甲南大学(詳細未定)

共 催 : 淡路景観園芸学校

シンポジスト : 浅野 房世  
(兵庫県立大学・淡路景観園芸学校/園芸療法)

岩城 見一(京都大学/美学・芸術学)

川戸 圓(大阪府立大学/臨床心理学・ユング心理学)

高阪 薫(甲南大学/近代日本文学)

田中 修(甲南大学/植物生理学)

指定討論 : 加藤 清(隈病院/精神医学)

斧谷 彌守一(甲南大学/言語論)

司 会 : 森 茂起(甲南大学/臨床心理学)



### 【編集後記】

今回ご紹介したミニ・シンポジウムのテーマ、アメリカを象徴するファーストフード。その対極をなすスローフードが最近静かなブームです。スローフードの代表格とも言える「シュールストレミング」を先日KIHSで初体験しました。生のニシンを塩水に漬け、非加熱のまま缶詰にしたスウェーデン名物です。数ヶ月間、閉じこめられた缶を変形させるほどのガスを放ちながら醗酵を続けたニシンは「世界で最も臭い食べ物」と称されるだけのインパクトを持つ一方で、その深い味わいが我々を虜にしました。「食」の観点からグローバリゼーションについて考えさせられる体験でした。このテーマの今後の展開にもどうぞご期待ください。